



山村のひとびとと共に

北海道大学名誉教授 川瀬 清



木曽林業の中心地、上松町で生まれ、小学校時代を過ごした私は、学校から帰ると鞆をほうり出して、山や川で自然を相手に遊んでいた。この時代の森や川の観察が、大学の講義をききながら、ふてぶてしく「俺の方がもっとよく知っているぞ」なんて思わせた。だから私は、「大学を出たら緑を育てる仕事をするんだ」ときめていて、それが当然と考えていた。

大学院生のとき、教授から「学校に残れ」といわれて大学に残り、紙パルプや木炭など、林産物の化学的利用を勉強した。そして大学生生活四十五年間が終わると、幌加内町の要請で、天職と考えていた緑の育成に参加できたのだから、楽しくて夢のようである。

町長からの要請と処遇

大学を退職して一年間は拙著「森からのおくりもの」の執筆に専念した。在職中に他の町からも、退職したらわが町に来て町の復興に協力してほしいとたのまれていたから、「あいつはいななか向きの男」という評判があったのかもしれない。

幌加内町の高垣町長が何人もの町の有力者をつれて大学に来て要請したことは、(1)笹紙を町の特産品にしてほしい、(2)立派な高校を建てるから、その施設をフルに活用して良い教育をし、生徒の数を増やしてほしい、(3)町を活性化してほしい、という三項目だった。

(1)と(2)は周囲の力強い協力があって数年で解決したが、(3)はなかなかむづかしい。町用車で町中くまなく案内してもらったが、活性化に利用できそうなものは、ほとんど見当たらなかった。そういう中でただ一つの宝は、朱鞠内湖を中心としたすばらしい自然、道立自然公園朱鞠内であった。

金・金・金、金さえあればの風潮の中で、町長は教育を町興しの中心にすえていていると思えて、私は尊敬した。そういう町長のお役に立ちたいと、勇んで町長室に入ると、町長は(1)「年俸を出すといいましたけど、

議会が反対するので出せません」、(2)「旅費は幌加内町で最高の、町長と同じ単価で、来てくれた日だけ出します」、(3)「予算のことはいわないで下さい」、といった、結局金のことばかりだった。

北大に在職中のこと、興奮して、「大学でこんなことがあっていいのか」と発言すると、後輩から「大学だって人間の社会ですよ」と言ってたしなめられた。こうした経験が役に立って、この程度では腹も立たなかった。

町の様子を知りたいと思い、若者をつれて酒を飲みに行くと、農家の人・労働者・社長など、いろいろな人と話すことができ、町の理解に大いに役立った。しかし、役場では旅費を出し忘れることもあって、帰りの汽車賃さえあぶないことが何回かあった。

こんな時、気をつかってくれたのが峰岸産業課長(現町長)で、外から金を持ってきて手当てとして渡してくれた。ついで新設の開発振興課の課長になって入ってきた番水さん(現商工会事務局長)は、町長の約束した年俸額を予算に計上し、助役と町長の判をとって議会に提出した。すると誰一人として反対するものがなかった。以来、私は年俸相当額を月給の形でもらっている。こうして私はこの町の体質を逐次把握することができた。

和紙風笹紙

この町に就任した当初は、大学時代に試作した器具を使って、浅草のりのような紙をすいていた。すると町の校長会から、幌加内町全校の卒業証書を笹紙にしたい、という提案がなされた。浅草のりでは証書にならないから、私は湿紙をはるカラー鉄板と、それを挟んで乾燥する枠が必要であることを説明し、十五万円を出してもらった。

笹紙をこの町の特産品として発展させるために、私は福井県今立町の農業特産物研修センター(パピルス

館)や、埼玉県小川町の県立製紙工業試験場など各地を訪れて、この道の先輩から親切な指導をうけた。さらに製紙会社などにいる北大の同窓生の協力も得て技術をみがき、日本一の溜すき技術を確立することができた。

技術の確立には新しい紙すき器の試作が欠かせない。それに必要な木工機械の昇降円鋸盤や手押し鉋盤は、番水課長が即刻用意してくれた。試作が成功すると、それを専門の業者に発注する。こうして幌加内町の笹紙は「平成の紙譜」という最新の立派な和紙の標本のトップを飾ることができた。



朱鞠内の笹藪

笹紙の誤算

笹幼稈のパルプは繊維壁がうすいので、和紙風の、やわらかい手ざわりの、すばらしい紙になる。今、旭川で、この人のために記念文学館を建てようとする募金が行われている三浦綾子さんも「笹紙は何とすばらしい手ざわりでしょう」と言っている。

はじめこの紙は、冬、農家のお年寄りがストーブの上で幼稈を煮てパルプを作り、センスの良い民芸品を作ってくれるものと期待していた。しかし、この町のお年寄りは、夏も冬もゲートボールに熱中していて、紙すきには関心をもたなかった。これは私の誤算であった。

高校の総合実習で紙をすかせる、なかなかセンスのある生徒がいて、面白い作品ができた。この実習はNHKテレビで放映され、その頃から入学希望者がふえて、四十名定員に七十八名が受験した。私はクラブ活動で紙すきをやりたいと申し入れたが、校長にも教頭にも、生徒が集まりすぎて他のクラブに影響するという理由でさせてもらえなかった。

この高校の落成式の祝辞で全道農業高校校長代表は「学校の主人は生徒である」と言った。全くそのとおりである。主人は校長や教頭でない。文部省や道教委は、学校の主人は生徒であることを、もっと徹底させるべきである。これが第二の誤算である。



笹紙の溜すき

オンリーワン

昨年、北空知元気村づくりの会で沼田町の若者と同じテーブルを囲むことができた。ナンバーワンよりオンリーワン、その町だけがやっている唯一の方法でなければ町興しは成功しない。「それをみんなで考え出すんだ」と意気込んでいた。沼田町はこれから、ぐんぐん伸びていくにちがいない。

広大な水面、豊かな緑、澄みきった空気の三拍子そろった自然環境はそうざらにない。幌加内は私がフィンランドに行ったとき、森と湖の観光都市プンカハールューから、友好都市になりたいと申し込まれた。自然の湖と緑ときれいな空気の都市である。

朱鞠内湖畔では木を伐ってブルで地表をはぎ、アスファルトで舗装して車の入りやすい都会風の空間作りが行われている。子供達がアスファルトの上に腰をおろして湖を眺めていた。狭くてもよい、車を入れないで、老人や子供や体の不自由な人でも、安心してくつろげる静かな緑の環境がほしい。

落穂ひろいの人生

何年前かにNHKラジオで「人生読本」の放送をたのまれた。教え子から、「朝早く配達に出てラジオを聞いていると、聞いたことのある声が聞こえてきた。……先生でした」と電話がきた。私は北海道の山にはいくらでもある腐朽材や笹を有効に利用しようと

して、研究をしてきた。また過疎の町の町興しに協力もしている。いずれも落穂ひろいのようなものである。そこでタイトルを「落穂ひろいの人生」とつけた。しかし本番の放送では偉らそうげな「落穂ひろいの哲学」に変わっていた。

この放送で私は、役場の人には、朝会ったら「お早よう」と言おう、商店の人には、お客さんに「いらっしゃい」と「ありがとう」を言おう、と呼び掛けていると話した。あいさつなんてつまらないと思っている人もあるが、これが意外と町の活性化には役立つものである。

私は外国に行くとき、その国の「アリガトウ」だけは覚えて行く。フィンランドでは「キートス」、ドイツでは「ダンケ」。ただそれだけで旅にうるおいがつくような気がする。

元収入役の夫人が、バイクの若者が、その日休みだった喫茶店の前で残念そうに立っているのを見て、「コーヒーを飲みたいんでしょ、インスタントでよければ飲ませてあげるよ」と言って茶の間でのませてあげて、すごく感謝された話をしていたが、幌加内にはこういう人もいる。近頃は、町の雰囲気は良くなって、若者と婦人がとくに前向きである。

話し合いの足りない行政

峰岸町長は「町を興すには若者と馬鹿者とよそ者が必要だ」と言っている。私もそのとおりに思っている。行政はメンツにこだわらないで町民と話し合うことが必要だ。馬鹿なふりをして他人の意見をきく度量が大切である。それができないところに過疎の原因がある。

道新の社説は士幌のトンネルについて、知事は対立でなく、話し合いのリーダーシップを取るべきだ、と述べている。千歳川の放水路問題も、石狩川の全水域で、河口で洪水のおきやすい、魚もえびも住めない自然破壊の河川工事を進めながら、何十億もの巨費を投じて、さらに自然破壊の放水路を造ろうとしている。どっちも筋の通らない話である。知事は北海道のため、道民のために、心ある人たちとよく話し合うべきだ。いまの行政に足りないものは誠意のこもった話し合いである。

身近な環境破壊・たばこ

会長の八木さんに請われて自然保護協会に入ったの

は十何年か前のこと。その総会にでてみると会場で自由にたばこをのんでいる。私ばかりでなく、何人ものご婦人が迷惑そうにしていた。そこで私は「たばこは一番身近な自然破壊なのに、どうして自然保護協会の総会に灰皿を置いてあるんですか」と発言した。多数の御婦人が一斉に拍手した。以後の総会には灰皿がなくなった。たばこ問題はいなかの若者ほど大変のようにみえる。

日本人は知識が豊富である。だから地球温暖化の問題を堂々と議論する。その一方で、リゾート法やらを作って、今まで手のつけられなかった国有林を伐って、ゴルフ場をとめどもなく造成している。地球温暖化防止には森林がどんなに大切かを知っているのに。その一方で開発途上国には熱帯雨林を伐るなど注文をつける。北海道だって、昼なお暗き森林を伐りひらいて今の文化的生活があるのだ。

軍隊は造らない、というわかりやすい憲法がありながら、今や世界屈指の軍事大国になっている。こうした矛盾をみると、小中学校の先生方の苦勞がわかって息苦しくなることがある。国のおおもとを見直す必要がある。薬害エイズに対する無責任さをみると、全くやりきれない。金のために人間の命まで犠牲にするのは下の下である。

ラジオ深夜便

夜中にふと目を覚ましてラジオを入れると、私と同年代の東大名誉教授が話をしていて、それをきいてみると、ボケているのは俺だけじゃないという安心感がわいてきた。林産技術普及協会からの電話の原稿依頼は四百字詰原稿用紙で十枚ということだったので気軽に引き受けたが、書面で来た時には、二十枚にはね上がっていた。

ちょっと驚いたが、それなら、気ままな放談で依頼に応えようと考え直して、かえって気が楽になった。読まれる方は、さらっと読み流していただきたい。

七月十一日では私は七十四才になった。ラジオを聞いていると、七月十一日の誕生日の花はハイビスカスで、花言葉は「つねに新しい美しさ」ということである。ますます古くきたなくなっていくが、せめて健康と心の美しさだけは保っていききたい。

私の一週間

私は幌加内の町民。町内会にも、老人クラブにも、

商工会にも入っている。だから友達も多い。町立病院の医師宿直室に陣取って、医者つき、栄養士つきで、いたって健康。土日は札幌の自宅に帰って、女房の手料理を食ってゆっくり休み、月曜に幌加内にもどって来る。

高垣町長に「予算のことはいわないで下さい」と言われたが、町を活性化させるためには、そうはいかない。スコップとトラックと運転者は最小限度必要である。ここから五十キロはなれた自然公園の整備には、それくらいは考えてもらはないと仕事にならない。

仕事を始めた当初は日曜だけが休みだったから、毎日の重労働で、これがいつまで続くだろうと不安になったこともある。何年か前の土曜の朝、役場に出ると誰もいなかった。当直から、土曜は休みになったと知らされたが、深名線の深川行きは三時までない。そんな時間まで待つ気になれず、タクシーで深川に出た。自宅に帰って休んでいると、土曜が休みのありがたさが、ひしひしと感じられた。

私は書くことも、しゃべることも、みんな幌加内の活性化のためと思ってやっているが、理解してもらうのはむづかしい。あいつをはやくやめさせたいと言うひともあるが、逆に理解してくれる人がだんだんふえてきた。こんなうれしいことはない。

町民懇談会

高垣さんの町長時代である。一人の町民がすくっと立って私の方を向き、「先生はこの町に来たとき、二十年先のことを考えてやりましょうといわれたが、私は大変よいことだと思うから、是非そうやって下さい」と言って頭を下げた。しかし懇談会の最後に町長は「二十年先のことなんて考えておれん」としめくくった。町長が亡くなったのは、それからそんなに日が経っていないから、俺の体は二十年なんてもたない、という意味だったのかも知れない。

前回の選挙のとき、町民懇談会で二十年発言をした人が町会議員に立候補した。私はかげながら当選を祈っていたが、幸い、かなりよい成績で当選した。幌加内にも、二十年先のことを考えて町政を運営しようとする人が出てきた。

湖畔の柳蘭

北大の学生時代、樺太の上敷香に軍の飛行場建設に行った。八月中旬の平原に紅紫色の柳蘭の花が一面に

咲いていた。あの明るいお花畑の印象は今でも消え去ることがない。

この花は幌加内町のどこにでもあって、特に群生してよく育つので、湖畔でふやしてオンリーワンにしようと、町内外の山野から集めて植え込んだ。これが順調に育って湖畔の景観を明るくにぎやかにしていた。

四年前の道新スポーツに「朱鞠内湖の湖畔がリフレッシュ——ヤナギラン満開」と大きくのった。その記事の中に、「朱鞠内湖にはもう随分昔から通っているが、こんなに花いっぱいのは初初めての体験で、何だかうれしくなってしまった」と書いてあった。すると観光客が大勢集まって、第二と第三キャンプ場のトイレがあふれてしまった。

朝日新聞に「世界花の旅」欄があって、ヤナギランが紹介されていた。アラスカの養蜂家達は群生するヤナギランから蜜を集めている。その中の一部を紹介すると、

「巣箱を開けると中に緑色の、仁丹のようなつぶつぶがたくさんたまっていた。それはひとつぶづつが花粉のかたまりだそうで、さらさらしていた。『花粉だんごは健康にとってもいいんだ。毎日、スプーンに一杯食べるのさ』リスカさんはそう言って、とりたての花だんごを手のひらの上ののせてくれた」と書かれている。

私の友人でフィンランドのルオコネンさんは、乾燥した緑色のヤナギランの葉を送ってよこしてくれた。健康食品の商品でマイトホルスマといい、お茶のようにして飲むそうである。

朱鞠内湖畔は、やせた心土が出ていて、生長力の強いヤナギランでも育てることは容易でない。こえた土を入れてほしいと要請しているが、なかなか理解して



湖畔の柳蘭

もらえない。営林署の畑に2メートルおきに点々と植えたヤナギランは、今では幅25メートル、長さ200メートルの土地にすきまなく群生して、夏になると一面に赤いじゅうたんを敷いたように咲き誇っている。残っている自然を活用しながら、破壊された環境の修復に努めているが、都会風にあこがれているこの町の人にはアスファルトのほうが魅力があるようで、理解してもらうのはなかなかむづかしい。

ドングリの育つ自然

緑の芝生で一面に都会風に整備された道路の法面は、自然公園には不自然である。一昨年秋、ドングリをひろい集めて法面に植えこんだところ、かなり目立って生育してきた。ここのミズナラの幼木は秋になるときれいに紅葉するので、単純な法面にうおいを与えてくれる。こんなやり方が老人にでもできる自然公園の整備である。

数日前、朱鞠内の八十才をこえた商店主から、花の図鑑についてきかれたから、「北海道の花」と「北海道の樹」を届けると代金を払うという。「いやいや、あなたから千島桜の大きな株をいただいたのがきっかけで、湖畔にすばらしい千島桜による環境が整ったんです。花でも勉強して長生きして下さい」と言った。しかし、後からピールが届いた。湖畔の千島桜は平地では、根室よりおそく花が咲き、日本で一番はやく紅葉する。

湖畔を山野草によって整備し始めると、植物に関心のうすかった町民から植物図鑑についてきかれるようになった。とくに女性からの要望が多く、「北海道の花」は随分出た。すると花に関する情報が集まるようになり、教えられることが多くなった。

湖畔には優に百種類をこえる花や木が入っているが育ちにくい。よく見ると、その中で崩壊したやせた土地にでも育っているエゾカンゾウ、ハクサンチドリ、ノビネチドリなどがここでもよく育ち、きれいな花を咲かせている。

農山村活性化の方途

過疎化の原因は国内情勢や世界情勢など、一寒村の手には負えないものもあるが、その町に内在する前向きな力が表面に出ると、そんなものは、はね返してし

まう。町を活性化させようとするれば、まず内在する力を掘おこす努力が必要である。すると、過疎の町では、そういうことをしようとする人に排除の力がはたらく。町民の話をおきくと、いままで多くのそうした人が排除されてきた。

この町にもやる気があり、センスのある人が大勢いる。とくに若者や婦人層には大きな期待がもてるから、それらの力を結集して、表面化し、排除の力が出てこられないようにするのが私の任務のように思えてきた。

アラスカにひかれて海を渡り、そこで結ばれた若い夫婦が、北海道の中ではアラスカに一番近いこの町の自然にほれて、町に住みついている。寒さを逆手にとって、「天使の囁きを聴く集い」をやって町の活性化に役立てようとしている若者もいる。道庁では、朱鞠内の研修施設「まどか」が若者からの評判が良い。

さらに、この町には北大や名大の教育研究施設があって、町にやる気さえあれば、子供たちにもわかりやすい、異色の科学館の建設にも協力してもらえる。こうした有利な条件の整った町は、ここ以外には滅多にない。自然と人間の力をフルに活用した人間教育や、通年の観光を充実させる独特のすぐれた条件が、天から授かっている。

(幌加内町専門員)

著者紹介

かわせ きよし

1922年 長野県に生まれる

1946年 北海道大学農学部林学科卒業

現 在 北海道大学名誉教授・農学博士
北海道特用林産物振興協議会会長
幌加内町専門員
幌加内高等学校講師

著 書 新版・林産学概論（北海道大学図書刊行会、1982年）

ヨーロッパの林業<共著>（北方林業会、1979年）

森からのおくりもの（北海道大学図書刊行会、1989年）